

石川県知事選挙の結果について

2026年3月10日 日本共産党石川県常任委員会

(一)

任期満了に伴う3月8日投票の石川県知事選挙で、わが党も参加する「憲法を生かす新しい県政をつくる県民の会」の黒梅あきら候補（能登半島地震被災者共同支援センター元事務局長）は、9,540票を獲得しましたが、残念ながら勝利できませんでした。新知事には、山野之義・元金沢市長（国民民主党や自民党の一部が支援）が馳浩知事（自民党、維新の会、未来石川、連合が推薦し、社民党が支援）を僅差で破って当選しました。同時に行われた金沢市長選挙では、現職の村山卓氏が当選し、わが党も参加する「市民本位の金沢市政をつくる会」の中内てるこ候補（新日本婦人の会金沢支部長）は13,074票を獲得しましたが及びませんでした。

県民、市民の願いを背に大奮闘した黒梅候補、中内候補に心から拍手を送るとともに、ご支持、ご支援していただいた県民、市民のみなさん、ご奮闘いただいた「県民の会」「市民の会」に結集されたすべての団体・個人のみなさん、読者・後援会員、そして2月の総選挙にひき続く連続選挙で、連日奮闘された支部と党員のみなさんに心から感謝申し上げます。

(二)

今回の知事選は、現知事と元金沢市長による保守分裂の激戦に、「県民の会」の黒梅候補が挑む選挙となりましたが、保守2陣営が、地元紙も「大きな方向性の違いはない」と指摘するように県政をめぐるまともな論戦がないなかで、黒梅候補は、国いいなりで被災地置き去りの県政をきびしく告発し、打ち切られた医療費免除復活など被災者の声を届け、逆立ちした県政を転換して暮らし応援の県政、志賀原発廃炉など、被災地や県民の切実な暮らしの声を堂々と訴え、米とイスラエルによる国連憲章・国際法を踏みじるイランへの先制攻撃の戦争の即時中止を訴えて奮闘しました。

昨年から、県内メディアも「馳か山野か」の大キャンペーンを展開し続けるなか、現職陣営は、終盤には高市首相も県内入りして異常なまでの「高市頼み」の選挙を展開しましたが、「県民党どころか高市・自民党そのもの」と冷めた声も広がり、山野氏は「まっすぐ県民目線」と「改革」ポーズを振りまいて馳県政に対する県民の批判の「受け皿」となりました。

黒梅候補は、立候補表明が1月下旬と遅れたところに、突然の解散・総選挙による中断を余儀なくされ、知事選挙のとりくみは事実上、告示一週間前からのとなり、黒梅候補の名前と政策の有権者規模での浸透が十分図れないまま選挙をたたかうことになりました。黒梅候補の訴えが届いたところでは、つよい共感の声と激励が寄せられました。同時に、激しい保守分裂選挙と県民に2択を迫るメディアの大キャンペーンを打ち破って前進をかちとる上で、党の自力の不足を痛感した選挙となりました。

(三)

選挙戦で黒梅候補が訴えた政策、とくに被災者の医療費免除復活や能登の復興支援、中小企業支援と賃上げ、中学校給食実現や教員不足解消、志賀原発廃炉などは、いよいよ切実な課題であり、黒梅候補を推薦してともにたたかった党として、選挙戦で掲げた公約実現へ全力で奮闘する決意です。米とイスラエルによる無法なイラン軍事侵攻の即時中止、平和な世界と日本をめざして奮闘します。

今回の知事選の結果は、先の総選挙での「高市人気」も、決して自民党政治への信任ではないことをあらためて示すものになったのではないのでしょうか。暮らしの困難が広がるなかで、国民・県民との矛盾はさらに深まらざるをえません。暮らしと平和の願いに応えるたたかいを大きく広げ、あらためて党の自力の不足を大きな教訓として刻み、一年後に迫った統一地方選挙勝利を展望し、たたかいと強く大きな党づくりへ、ただちに活動の強化を図っていく決意です。ひきつづく大きなご支援を心からお願ひするものです。